ご挨拶

85年のつながりに感謝して

小阪産病院は平成24年12月からＳＤ建築様に設計を、戸田建設様に施工を依頼し、旧病院の南側隣接地に新病院の建設を進めて参りました。その結果、平成27年３月には新病院が完成し３月末の３日間に引越しをして、４月１日からは新病院での診療を開始することが出来ました。

その後、旧病院の中でも比較的新しい北館の一階を改装して米田美幸保先生を院長に迎え、５月１日から「小阪レディースクリニック」を開設しました。ついで二階の元ＬＤＲだった所には、芳中シゲ子元看護部長をセンター長として、７月１日には「産後ケアセンター小阪」をオープンすることが出来ました。

こうして３本の矢とも云える体制となった小阪産病院は、平成28年７月10日をもって創立85周年を迎えることが出来ました。昭和６年７月10日の開院から、戦前・戦中・戦後に渉る85年もの間、続けて来る事が出来たのです。これは、病院理念として来た「患者様満足」「自己開発」「報・連・相」を目指して、昼夜に亘る努力を続けて来た全職員の熱意を、地域の皆様に認めていただいて「小阪の産院さん」と親しみを込めて呼んでいただき、２代、３代にも亘って広くご利用いただいて来た結果だと、深く感謝しているところです。地域の皆様の、親から子へ、子から孫へと〝愛をつなぐ〟お手伝いをさせていただく大切なお仕事を、これからも心をこめて続けて行きたいとの願いから、今回の記念誌のテーマは〝つなぎ愛〟とさせていただきました。

わが国は近年、世界で最も安全に出産し、子育ての出来る国になりました。これは全国的に周産期医療のシステム化が整備されて来たことによるものです。特に大阪では全国に先駆けて新生児診療相互援助システム（ＮＭＣＳ）、産婦人科診療相互援助システム（ＯＧＣＳ）さらに新生児外科診療相互援助システム（ＮＳＣＳ）の整備が進んで参りました。お蔭で今では高次医療施設への母・児の緊急搬送もスムーズに行えるようになり、心から感謝しております。一方不妊治療施設で妊娠に成功された方や、遠方からの里帰り分娩の方をご紹介いただいたり、近隣の先生方とはセミオープンシステムによる周産期の共同管理をさせていただける事も大変有難いことと存じ、厚く御礼申し上げます。

私は日本産婦人科医会の故、坂元正一会長、故、寺尾俊彦会長、そして現、木下勝之会長と３代の会長の下で、副議長、議長、副会長などを十数年に亘り勤めさせていただき、全国的視野で産婦人科診療のあり方を考える機会を得ました事は真に有難かったと感謝しております。ただその間、自院を留守にすることも多く、平岡院長はじめ院内のスタッフの皆様には大変ご苦労をおかけして参りました。幸い一昨年からは重責を解いていただいた事もあり、今後はせっかく作り上げた３本の矢とも云える体制を活用して、地域の皆様にも、ご紹介いただく先生方にも、お役に立てる病院として喜んで頂けるようにスタッフ一同と共に努力して参る所存です。同時に２００余名のスタッフの皆様にとっても、モチベーション高く、働きがいのある病院であり続けて行けるようにと念願しているところです。

関係各位の皆様の、より一層のご指導とご支援をお願い申し上げまして、85周年のごあいさつと致します。

平成28年７月10日

理事長　竹村 秀雄

小阪産病院
院　長　平岡 仁司
小阪レディースクリニック
院　長　米田 美幸保
小阪産病院
副理事長　竹村 真紀
理事長　竹村 秀雄

小阪産病院 85 周年記念誌

つなぎ愛

目　次

ご挨拶……2

生まれ変わった小阪産病院……5

PART1
地域とつなぐ

地域医療連携室……12

セミオープンシステム……14

不妊治療……16

出生前診断……17

産後ケア……18

小阪レディースクリニック……20

地域とのふれあい……22

PART2
未来とつなぐ

“小阪っ子” 乾杯!……24

リーダーたちの思い……26

未来とつなぐ、愛・アイ・あい……30

データで見る小阪産病院……37

小阪産病院85年のあゆみ……44

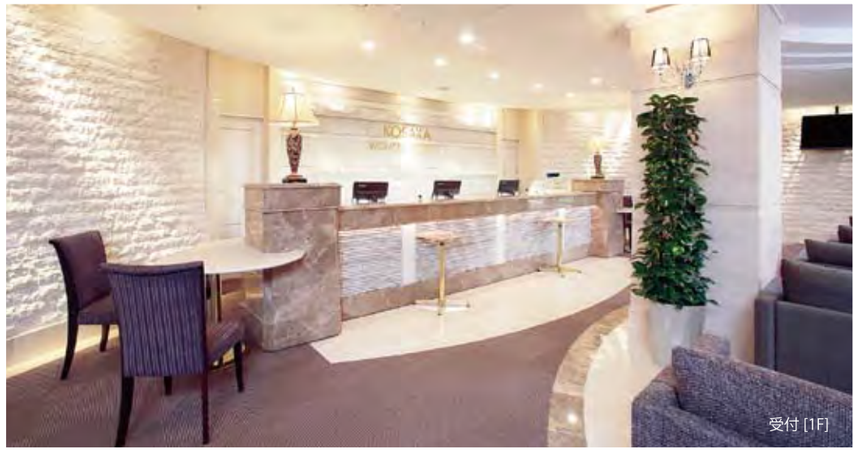
85周年に寄せて……50

生まれ変わった小阪産病院

診察室 [1F]

NST ルーム [1F]

LDR 室 [2F]


受付 [1F]

一階は病院の顔ともいえる外来エリア。受付、待合ロビー、外来診察室、助産師外来、超音波検査室、赤ちゃん外来など。二階は分娩室（ＬＤＲ）や手術室、新生児室、病室で構成。

手術室 [2F]

フロアロビー [2F]

キッズコーナー [1F]

待合ロビー [1F]

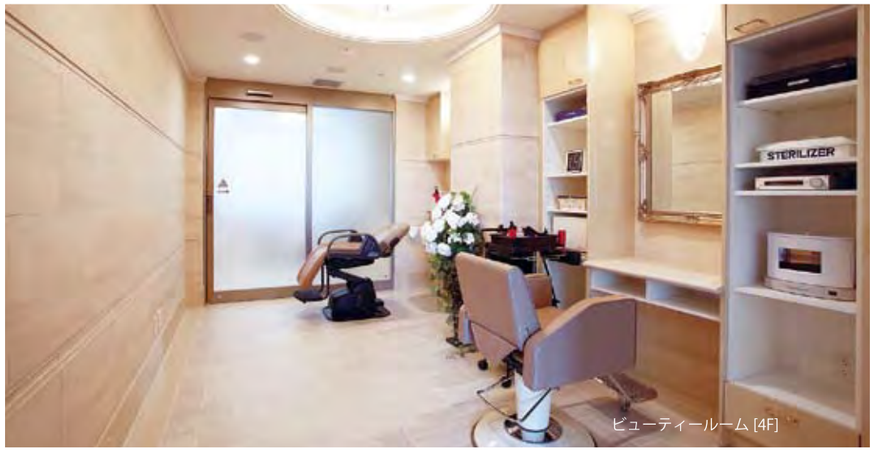
二階から四階は病室エリア。特室ではご主人も宿泊できます。三階には調剤室・薬局があり、四階には入院中にご利用いただくビューティールームやエステルームも完備。

入院室 201 特室 [2F]

入院室 305(個室)[3F]

フロアロビー [3F]

入院室 201 特室 [2F]



ビューティールーム [4F]

エステルーム [4F]

フロアロビー [4F]

PART1

地域とつなぐ

地域医療連携室

命をつなぐ地域の要、地域医療連携室……12

セミオープンシステム

セミオープンシステムのお産は
母児と医師にも安全で安心……14

不妊治療

不妊治療後の妊婦さんを支える
高レベルの医療と家族的な雰囲気……16

出生前診断

医師とコーディネーターの両面からお母さんと
おなかの赤ちゃんにとことん寄り添い支えます……17

産後ケア

赤ちゃんのお母さんになる準備を
ベテラン助産師がお手伝いします……18

小阪レディースクリニック

地元の女性の生涯を通しての
トータルヘルスケアをサポート……20

地域とのふれあい

東大阪で!　大阪南港で!
赤ちゃんと家族が大集合……22

ダイニングルーム

ダイニングルーム[1F]

ママ友に出会えるショップ&施設のご紹介です。ロビー脇の赤ちゃんグッズ専門の「テンマンス」、五階には朝食やお祝いディナーのダイニングレストラン、別館では各種教室を開催。

マタニティサロン [別館]

ショップ 10MONTH[1F]

マミールーム [別館]

セミナールーム [別館]

地域医療連携室

命をつなぐ地域の要、地域医療連携室

小阪産病院における医療連携の主体は、地域の診療所や助産所からの依頼に応じ、ハイリスク例には高次医療機関に依頼する、お産を中心としたものでした。しかし時代とともに、連携の分野は広がり多面的になってきています。昨今の晩産化、高齢初産化の傾向は、当院でも顕著な現象です。データを見ると、22年前の初産婦の平均年齢と比較すると、3・2才高い30・5才（2015年）で、35才以上の初産婦（高齢初産婦）は全体の11％をしめています。

このような状況にともない、新たな分野での医療連携も実現しています。ひとつは、日本における不妊治療の最先端をいく、森本義晴先生率いるIVFグループとの連携。不妊不育治療後に妊娠された方に、きめ細やかな対応とケアで妊娠中から出産までサポートしています。さらに、生まれる前の赤ちゃんの診断では世界的な権威である、夫律子先生のクリフム夫律子マタニティクリニックとの連携も。高齢出産のため、おなかの赤ちゃんの遺伝的あるいは先天的な病気を心配されるかたのためのサポートが深まりました。また、昨年旧小阪産病院の建物に開設した、婦人科・乳腺外科専門の小阪レディースクリニックとの連携も万全です。

これまでの出産のためのサポートはもちろんのこと、これからは思春期から更年期、老年期まで、様々な分野との連携をはかり、さらに広く深く、女性一人ひとりに合ったトータルサポートをめざしています。

地域医療連携室長
坂口 マサエ さん

医療連携を支える縁の下の力持ち！

紹介状を持ってこられた方を最初に迎えるのが地域医療連携室です。私と、クラークの長井の二人体制で対応。主な仕事としては、他施設から紹介された方の受け入れ。これは里帰り出産が一番多いですね。かかりつけの医師の紹介状を持参されたら、問診後、患者さんは外来へ。そしてまず相手方の先生に「患者さまが来られました。ありがとうございます」の受診報告を、その日のうちにファックスで送付。その後、当院の医師による報告書にお礼状を添えて郵送、出産されたらその報告ももちろんのことです。近年増えているのが、不妊治療施設からの紹介や、セミオープンシステムによるものも少しずつですが確実に増えています。

こちらから紹介状を作成して送り出すケースで最も多いのが、ご本人の希望も含めて、大阪府下の高次医療機関での周産期管理の依頼です。診療予約の手配もこちらでします。先方から当院へ届いた情報は、院内スタッフに報告、提供して共有。要は、紹介状を中心に、「出」と「入」をさばく仕事ですね。それも、手際よく迅速に、ひとつも漏らすことなく確実に！です。

初めて当院でお産を、と来られた方には一通りの流れを説明します。ご本人以外にも、ご両親とかの場合もあります。その間に、お産の緊急搬送があったり、救急車を待ち、院内に誘導案内するのも仕事のひとつです。新館に移って、特にセキュリティが厳重なので、救急隊員といえども エレベーターには乗れませんので。こちらから搬送した場合は、当院の○○医師が同乗して向かいました、と先方への連絡も。こういうときは、ちょっとあわただしいですね。

メールでの新患予約や問い合わせ、電話も結構入ります。最近多いのが、超音波外来と遺伝カウンセリングの予約。特に遺伝カウンセリングは、一定の週数までに受診する必要があるというしばりがあるので、とても悩まれるようです。「予約は仮押さえしておきますので、よく考えてみてください」とアドバイスしたり。でも晩産化のせいか、予約はすぐにいっぱいになります。

親身な対応は心がけつつも、「必ずかかりつけの先生の紹介状をお持ちください。結果は報告しますので、こっそり内緒で検査はできませんよ」とお話しするんです。双方の施設が連携して情報を共有し、患者さんをサポートすることが本来の地域医療連携の原則ですから。

また、新しい連携としては、去年オープンした小阪レディースクリニックは大きいですね。強力なタッグを組んで、両施設からの紹介報告に力を入れています。

患者さんをとりまく環境や背景を考えると、様々な医療連携は必須です。精神的な不安など抱えている方も少なくない。そのため、心療内科など、紹介先も多岐に渡っており、さらなる他分野との連携も待たれます。

column

第４回医療連携懇話会

文化講演〈司馬遼太郎と『洪庵のたいまつ』〉

小阪産病院が日頃からお世話になっている病院や診療所の先生方と、共に学び親交を深める場として、3年前にスタートした医療連携懇話会。第4回は、2月27日、スイスホテル南海大阪で、ゲストと当院スタッフ合わせて43名の参加で開催。メインの特別講演はこれまでは漢方や出生前診断などの医療が中心でしたが、今回は趣向をかえて〈司馬遼太郎と『洪庵のたいまつ』〉と題した文化講演に。演者は地元小阪に縁の深い司馬遼太郎記念館の上村洋行館長。没後20年というこの年に、義弟として身近で見てきた司馬さんのエピソードを交えながら、日本人とは、日本の国とは、を終始考え続けてきた彼の視点について、熱のこもったお話しを伺うことができました。

左から竹村礼子（小阪産病院副院長）、上村洋行氏（司馬遼太郎記念館館長）、竹村秀雄（小阪産病院理事長）、都竹理氏（都竹産婦人科院長）

セミオープンシステム

セミオープンシステムのお産は母児と医師にも安全で安心

お母さんとおなかの赤ちゃんに特別異常がなければ、妊婦健診は通院しやすく顔見知りの多い自宅や職場の近くのクリニックへ通い、お産は医師や医療施設の充実した地元の病院へ引き継がれる、また必要な場合には高次医療が受けられる周産期センターへ、といった対応でお産を支援するセミオープンシステム。

それぞれの施設としっかり連携し、情報を共有して、お母さんとおなかの赤ちゃんを切れめなくケアし、安心安全なお産をめざす、きめこまやかな工夫のあるシステムといえます。

当院は地元の東大阪市はもとより、八尾市や堺市、大東市の他、天王寺区や平野区など大阪市内の16の施設と連携してセミオープンシステムに協力していただき、お産をサポートしています。

当院とはセミオープンシステムと呼ばれる前からの医療連携で、妊婦さんをご紹介いただいている地元の笠原医院の院長であり、また大阪府医師会理事でもある笠原幹司先生に、セミオープンシステムについてうかがいました。

笠原医院院長、大阪府医師会理事
笠原 幹司 先生

医療連携によるセミオープンシステムについては、地域の診療所の医師としてはもちろん、大阪府医師会の理事としても、今後もどんどん推進していかなければならないと考えています。これは、大阪府産婦人科医会、おそらく大阪府医師会の方針でもあるといってもよいと思います。

その目的は妊婦さんと赤ちゃんの安全のため。と同時に、医師の負担の軽減もあるのです。お産にはリスクはつきもの。ベテランといえどもそのストレスたるやはかりしれません。そのストレスを、一人の医師でなく大勢の医師でお産を診ることで分散する。患者さんにとっては、地域に産む施設が減るというデメリットがありますが、お産の施設を集約することで結果的に安心安全なお産に至っているのです。

地元医たちの医療連携の歴史がセミオープンシステムの下地に

50万都市の東大阪市で、現在分娩を扱っている施設は小阪産病院を含む4カ所。すべて病院です。もう個人で分娩を扱う施設はなくなりました。かつて、約半世紀ほど前はそうではなかった。当時の布施は、地元の12人の産科医たちが、医療連携のようなかたちでがんばってお産に取り組んでいたのをご存じでしょうか。〈東大阪ギネグループ〉という、私の父や竹村秀雄先生もメンバーでした。

ところで、産科の救急で一番多いのが大出血です。この場合、診療所の医師一人ではとても対処しきれません。気持ちの上でも半ばパニック状態です。こういう時、グループのメンバーを要請しサポートしてもらえれば、冷静に対応できる。そのため、様々なアクシデントにそなえてメンバーの電話連絡網を整備し、皆、同じ麻酔機器を購入し、勉強会をし、誰でもどこでも対応できるシステムを作った。そしていざという時には、一人は記録係、一人は麻酔係というふうに、大病院と同じ体制で臨んでいた……そんな話を父などから聞いたことがありました。まさに、地元の診療機関の医療連携といえます。

そういった経緯があり、気心のしれた医師同士だから助け合えた。そして時が移り、今度は「お産やめるからあと頼むよ」と言えたんですね。私は平成8年に父のあとを継ぎましたが、当院はじめメンバーの皆さんはお産をやめられており、ギネグループも消滅していたようです。当時の電話連絡網の古い紙が当院の壁に今も残されています。

考えるに、東大阪はいい意味でうまく時代の要請に応え、その流れに乗れたのではないか。そこに至るにはやはり、小阪産病院、竹村秀雄先生の熱心さ、がんばりというものがあった。『竹村先生やったら任せられる』と皆さん、お産から引いていった。言葉にしなくても、そういう思いがあったのだと思います。

大阪府のお産のバックアップ体制は万全です

地元で産んで地元で育てる――地元完結型はすばらしいことです。しかし、すべてが安全なお産ができるとはいえないのも事実。晩産化で高齢少子化の傾向は止まらず、リスクも高くなっている現実があります。

幸い大阪府は5つの高次医療専門の総合周産期センターがあり、バックアップ体制は万全です。また大阪府は面積的にさほど広くないため、救急車での搬送先を見つけるまでに約10分、決まればそこから約20分、合計約30分で総合医療センターに搬送することができます。実はこのことは府の理事になって初めて知ったのですが、大阪府というのは全国的にみて安全なお産ができる地域だということも、アピールさせていただきたいと思います。だからこそ、地元で完結できるお産を支えるセミオープンシステムは、これからももっとあちこちの地域で発展していってほしいと願っています。

妊婦健診セミオープンシステム登録医院

東大阪市
① 笠原医院（稲田本町）
② 坪倉産婦人科（若江本町）
③ 東條医院（足代北）
④ 南野産婦人科（鴻池本町）
⑤ 西岡医院（吉田）

八尾市
⑥ 中島産科婦人科（北本町）
⑦ なかじまレディースクリニック（東本町）
⑧ 萩原クリニック（春日町）

大阪市
⑨ 東婦人科眼科（天王寺区）
⑩ いながきレディースクリニック（東成区）
⑪ 上本町ヒロミレディースクリニック（天王寺区）
⑫ 神吉産婦人科（旭区）
⑬ しもむら本町レディースクリニック（中央区）
⑭ 高木レディースクリニック（平野区）
⑮ ちもりメディカルクリニック（福島区）
⑯ 野村クリニックなんば院（中央区）

東大阪・八尾・大阪市以外
⑰ 赤井マタニティクリニック（堺市）
⑱ 小林医院（大東市）

不妊治療

不妊治療後の妊婦さんを支える 高レベルの医療と家族的な雰囲気

私たちIVFグループ3施設（IVF大阪、IVFなんば、HORACグランフロント大阪）は、不妊治療を専門とした生殖医療を行っており、年間約1500人が妊娠に成功しています。私たちの目的は妊娠なので、妊娠を確認したら8週で当院から卒業です。が、その前に、私たちの手を離れる患者さんにふさわしい産科施設を考え、紹介状を書き、送り出す仕事があります。私たちにはうちから巣立った人たちのその後は見えません。だからその選択はとても大事です。

というのは、うちで妊娠した人には10年くらい苦労されてきている方も少なくない。子どもができず、周囲からの心ない言動に傷つき、それでもトライし続けてようやく妊娠。だから年齢もいっている。そういう思いをしてきた人が出産するのなら、やはりハッピーなマタニティライフとハッピーなお産をしてほしい。

不妊の方の目標は妊娠すること、でも実はあったかい家族を作ることなんですね。そこのところのかなりの部分を、産科病院がになっている。だから一般の妊婦さん以上にお産をする施設の選択は、私たちにとっては最後の大事な仕事といえるんです。

それを提供してくれる最有力な産院が小阪産病院。事実、数多くの患者さんがお世話になり、また逆に不妊の方も多く当院に紹介していただき、連携をとり合っています。小阪産病院のよさは、まず医療レベルが高いこと。多くのドクターがいますし、また高齢の方は合併症も多いので、何かあれば高次医療施設へつないでくれるネットワークも完璧です。

さらに院内全体に流れる家族的なあたたかい雰囲気。新病院になっても、これは変わらない。トップの竹村秀雄理事長からドクター、助産師、ナース、食堂やクリーンスタッフまでその精神が浸透しています。そのホスピタリティの高さは、不妊治療の末に妊娠した女性が人生最高の出産を迎えるのにふさわしいと思うのです。

スタッフの知識交流でも連携

小阪産病院との連携は、患者さんの紹介という形だけではありません。私たちのスタッフの教育でもお世話になっているんです。というのは、我々は仕事として日常行っていることが、結果としてどういうふうにつながっていってるか、妊娠中の経過から出産までを実際に知ることはありません。スタッフがそれを勉強したいということで、小阪のナースと連携して勉強会をしたり、病院に行かせていただいたり。これは生殖医療という仕事をしていく上で、大きな知識、土台になっているはずです。

また、竹村秀雄先生が音頭をとられて毎年開催されているマタニティカーニバルへの参加。これも広い意味での知識交流、連携のひとつです。うちのスタッフもボランティアで参加させていただき、小阪のスタッフの熱い仕事ぶりに触発され、多くの妊婦さんや赤ちゃん連れの家族と交わることでいい刺激を受けているようです。こういう受け皿のある小阪産病院との連携が、患者さんから我々スタッフまでできていることはとても幸せなことです。

IVF JAPAN グループ CEO
森本 義晴 先生

出生前診断

医師とコーディネーターの両面から お母さんとおなかの赤ちゃんにとことん寄り添い支えます

妊娠、出産を望む女性の年齢が上がっている今、おなかの赤ちゃんの病気を心配する傾向は強くなる一方です。私のところは、おなかの赤ちゃんに病気があるかどうか診るという、特殊な専門施設です。小阪産病院からも高齢のため赤ちゃんが心配だといった方が、竹村秀雄先生の紹介で受診されています。このように産院やかかりつけの医師を介して来られる他、自分の意思で来られる方も多いんです。やはり高齢のためとか、家族や親戚に遺伝的な病気があるためといった理由です。ですから年齢的には40代が多い。35才以上が7割近いですが、最近では20代もふえつつあります。

科学的な根拠で「安心」を伝えること

私の仕事はお母さんに「大丈夫ですよ」と、安心を与えること。そのためには、常に最新の超音波機器を駆使して、おなかの赤ちゃんをくまなく診て、場合によってはさらに検査を進めて、結果を分析し総合的な診断をします。「おなかの赤ちゃんに病気はありません」とお話するためには、数多くの確かな科学的な根拠（エビデンス）をそろえ、お母さんの不安を解消してあげなければなりません。

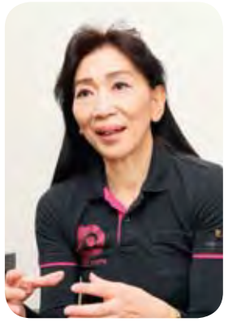
「おなかの赤ちゃんに病気があります」と言わなければならないケースもあります。このお母さんに対しても、私は別の「安心」を与えたい。診断＝ゴールではない。そこからがスタートだからです。まず病気についてきちんと説明し理解してもらった上で、最適な治療とケアが受けられる施設と、それを可能にするプロフェッショナルの医師を探し選び、お母さんに提案し、私から依頼する。お母さんが次のステップに進めるようつなぐんです。次にお母さんの産科施設を探し依頼する。その上で、心配事や相談があればいつでもあなたの味方と、とことんお母さんに寄り添う。それが私のやり方です。

私はおなかの赤ちゃんを診るスペシャリストであるとともに、赤ちゃんとお母さんをその先につなぐコーディネーターでもあるんです。医師として、科学的な根拠をもとにした診断にはいっさいの感情はありません。でもコーディネーターとしては、人間としての熱い想いなしではできません。

私には学閥などのしがらみがないので、ある意味、中立の立場です。だから私が一番いいと思う施設、医師に頼みます。小阪産病院の竹村秀雄先生には、紹介を受けた患者さんの診断をもとに相談したりアドバイスしていただくことも。大阪中の医師から信頼され敬愛されている先生ですから、各分野の先生方とも親しく、私にはとても心強い医療連携なんです。それに高次医療施設につなぐことのないお母さんは、家庭的な雰囲気の小阪産病院でお産ができるので安心です。

私どもの患者さんは日本各地から、海外からの方もいます。地方の高次医療施設や医師は、国内外の超音波学会などで懇意にしていただいている先生方のネットワークを活用。夫律子の診断なら、依頼ならと、快諾してくれ、今や全国規模の連携が広がっています。

そしてもうひとつ、お母さんとのつながりも忘れてはなりません。どんなことがあっても「安心」を持って帰ってもらえるよう、がんばってきた私の宝物。今でも10年前に出産したお母さんから、子どもさんの成長の写メが届きます。これまでもこれからも、私のパワーの源は、赤ちゃんが好きという気持ちです。



クリフム夫律子マタニティクリニック
臨床胎児医学研究所　院長
夫　律子 先生

産後ケア

赤ちゃんのお母さんになる準備をベテラン助産師がお手伝いします

産後ケアセンター小阪は、お母さんになったばかりの女性の心と体のケアや、乳房のケア、育児指導などのサポートをする施設です。対象は産後4カ月未満のお母さんと赤ちゃん。旧小阪産病院の2階にオープンして、7月で1年を迎えました。

女性の晩産化や少子高齢化、核家族化など、時代の変化や社会現象によって、過酷な育児環境にいるお母さんが多くなっています。「健診などで妊婦さんと話す機会が多いのですが、一見問題など何もなさそうな優等生タイプの人が、実は誰の助けも得られず孤立した中で育児をせざるを得ないというケースが増えていると実感します」（小阪産病院・金英仙母性看護専門看護師）

これまでは実家の母親が全面的に力になってくれ、産婦さんは体を休めながら育児を教わり、徐々に慣れていくことができました。しかし、頼りたい母親は高齢で介護を受けていたり亡くなっていたり。一番身近かな夫も、働き方や仕事の多様化で、協力したくてもできない状況のこともある。その結果、退院直後から、たった一人で赤ちゃんと1対1で向き合うことになり、孤立して心身のバランスを壊してしまう…。

「きっかけは睡眠不足と、人と話さないことが多いです。眠らない、誰とも一言も話さないでいたら、ストレスでお乳は出ません。出ないから赤ちゃんが泣く、泣かれるとパニックになる、という悪循環に。『赤ちゃんのお世話は私たちにまかせて、とにかく眠ったらいいよ』と話すと、すごく安心して、もうこんこんとひたすら眠り続けるお母さんが多いですよ」（矢野小百合チーフ）

「悩みは様々でも皆さんごく普通の人たち。それが、育児をするうえでベースになる授乳のリズムが十分できず、生活すべてにひびき振り回されてしまう。自分の食事も、トイレさえ満足に行けなくなっています」（久米邦子チーフ）

センターに来て、スタッフやほかのお母さんと一緒におしゃべりしたり、ご飯を食べたり、お風呂に入れるのを見てもらったりするうちに心がほぐれ表情が明るくなってくるお母さんたち。スタッフはベテランの助産師ぞろいで、お母さんの性格や育児への取り組み方など話の中からくみ取って、一緒に考え進めていくというスタンスです。そうです、ここは第2の実家、スタッフは第2の母親です。その人に合ったやり方で、赤ちゃんのお母さんになる準備をお手伝いします。

「実家が遠く、母の援助も頼めず、出張がちの夫なので、夜一人で子どもといると怖くて心配で眠れません。3回目の利用ですが、ここにくると、スタッフの皆さんにかわいがってもらえるし、お母さんたちと一緒に食事をしながらおしゃべりするのが楽しみです。夜もぐっすり眠れます」と話してくれたママ。その表情は慈しみにあふれていました。

「お母さんのお手伝いをしたいけれど、病院スタッフには限界がある。そのため、地域の保健師さんと連携してつないできた」（金専門看護師）土台が小阪産病院にあります。そして、1年前、東大阪市からの委託を受けて産後ケアセンター小阪が誕生、さらに手厚い支援が実践できることになりました。

母乳はお母さんからの最高の贈り物

「看護部長時代、出産して退院したお母さんと赤ちゃんの様子が知りたい、そしたら入院中の指導がもっと適確になるのではと、新生児訪問をしたことがありました。でも長続きしなかった。このままではいけない、おっぱいを十分に飲ませられるような手助けができればいいな、とずっと心残りでした。それが、産後ケアセンター小阪の開設で、やっと実現。産婦さん以上に、私はものすごく嬉しい。

おっぱいは育児の中では大きなポイントです。おっぱいが出る、全然吸いつけなかった児が飲めるようになる。ほんの少し手を差し伸べるだけでどんどんよくなります。母乳で大きくしたということはお母さんの自信につながるし、実際母乳で育った子は強い。どのお母さんも願う健康で賢い子になりますよ、って話すんです。3時間おきのミルクに比べると、母乳は1時間半とか2時間で赤ちゃんは泣きます。それは回数多く、うんとお世話していること。それだけいい刺激を与えている。今はちょっとしんどいけどがんばってみて。今の世の中、大概のものは、お金で買い与えられるけど、おっぱいだけはあなただけしか与えられない最高の贈り物なんですよって。おっぱいマッサージをしながらお話しすると、とてもいい表情になります。ようやく叶った私のやりがい、生涯かけてできるいい仕事です」

（芳中シゲ子 産後ケアセンター長）

産後ケアセンター長
芳中 シゲ子 さん

column

途切れることのない支援に向けて

支援の必要なお母さんにはできるだけ早く、妊娠中からかかわりなさい、というのが今の母子保健の流れです。お母さんの心と体を支え、赤ちゃんの健やかな生育を支えるため、具体的にはお母さんをとりまく様々な環境、背景による孤立化や産後うつを防ぎ、児童虐待を未然に防ぐためです。

それは、地域を担当する現場の保健師たちがずっと感じていたことでした。そして小阪産病院の助産師さんたちもおなじでした。だから、心配な妊婦さんを一緒に支援してほしいと、小阪側から発信してくれた。ありがたいと思ったのは、妊娠、出産から退院まではサポートできるが、その後の支援は地域の保健師の仕事だと認識されていたこと。そのため妊娠中から互いに連携し、情報を共有し、時には調整役として、私たちやお母さんの代弁者になってサポート、その後もとぎれないようにとつないでくれたのです。

この早期からの保健福祉連携の活動が、12年の東大阪母子支援ネットワーク連絡会議に発展。さらに今年、残る3産科施設とも地域連携を結ぶことに。地域が第1と考える小阪産病院の姿勢が、これらのベースであることはまちがいありません。またこのたび、産後ケアセンター小阪もスタートされ、まさに母親支援の第一線をいっていただき心強い限りです。

育児は慣れるまでは孤独です。見守る目がないと、あっという間に孤独に陥ってしまう。「心配せんでも大丈夫、私たちはあなたの味方やからね」と言い続け、寄り添い手を差し伸べていくことが私たちの使命だと思っています。

東大阪市健康部保健所
母子保健感染症課 総括主幹
千代 みどり さん

小阪レディースクリニック

地元の女性の生涯を通しての トータルヘルスケアをサポート

小阪レディースクリニックは、婦人科、乳腺外科専門のクリニックです。小阪産病院が産科専門病院として新館へ移転したのを機に分かれ、旧病院の建物一階に開院、七月で一周年を迎えました。東大阪市の婦人科クリニックとしては初めての女性医師の米田美幸保院長に、地元の女性たちから熱い期待が寄せられています。この一年をふり返り、クリニックがめざす地域とのつながりについてきました。

これまで小阪産病院は妊婦さんがいっぱいで婦人科は行きづらい、産科と婦人科を分けてほしいという患者さんからの要望が多かったのですが、今回ようやく実現できました。やはり受診しやすくなったようで、予想以上に多くの方が来られ、待合室でもリラックスされています。高校生から若い方、更年期から高齢のおばあさまま、年代も相談も多岐に渡っており、ちょっと気になるけど面倒だからと、先延ばしにしていたような方も来てくれているように思います。妊婦さんと分けることで敷居を低くしたのが、気軽さと安心につながっているようです。

小阪レディースクリニック
米田 美幸保 院長

子宮ガン・乳ガン検診の同日受診

子宮ガン検診、乳ガン検診に力を注ぎ、地域のガン検診受診率の向上にも寄与できるようになりました。特に子宮ガン検診のシステムには力を入れており、近ごろ増えている最新の検査法（液状細胞診）も取り入れ整備。妊婦さんにはできませんが、一般の女性にとっては最良の方法です。また、以前は異常があればすべて他院に紹介していたのが、こちらで精密検査も可能に。さらに予約すれば、子宮ガンと乳腺専門医師による乳ガンの検診が、同じ日にできるようになり大変好評です。子宮ガン検診は、ガンになる前の段階を見つけるのが目的です。症状がなくても調べるもので、異常と出ても即子宮ガンというわけではありません。東大阪市と八尾市では、2年に1回公費で受けられるので、定期的に受診しておくと安心です。

マンモグラフィや乳腺エコーは女性技師が担当します

思春期世代はまず自分の体を知ること

高校生など思春期世代の受診は、避妊の失敗、性感染症、不正出血、月経痛と様々。友人知人やインターネットなどで調べて勝手に自己診断し、さらに心配になって、という方も。治療も大事ですが、その前に自分の体のことを知ってもらうことを心がけています。体の仕組みなど基本のところから説明していくので、結構時間がかかりますが、これは絶対はずせません。

いつも笑顔で接するように心がけています

婦人科は正常か異常か、他人と比べられないのが特徴。月経量やおりものの量など、こちらが診ると問題なくても、人と比べられないから心配という人が多いんです。「それは心配ないですよ」のひと言で安心される。それを言ってあげるのが私の仕事。じっくりとていねいに話に耳を傾け、悩みをきくところからおつきあいが始まります。

高齢者の味方、地元女性の味方

これからは高齢の方が増えると思います。足が不自由になっても、車イスになっても、悩みや痛みを我慢せず、元気なころと同じように来ていただきたい。内診室は大きくし、車イスで入れるよう、私たちスタッフが介助しやすいような体制も万全です。お話をきき、治療し、少しでも以前の快適な暮らしに近づけるよう、力になりたいと願っています。

対象がすべての世代の女性なので、女性同士ということで来やすくなったと言ってもらえることが多いですね。男性医師には言いにくいセックスや性生活などデリケートな内容や、部位の悩みなど、頑張って話してくれるので、こちらもなんとか解決の糸口を見つけようと一緒に頑張っています。こんなクリニックが近くにあってよかったと信頼し気軽に来ていただけるよう、女性の生涯を通してのトータルヘルスケアサポートができる施設として、地元の女性に貢献していきたいと思っています。

column

赤ちゃん連れでにぎわう「Garden cafe oasis」

産後ケアセンター小阪や小阪レディスクリニックが入る旧小阪産病院の1階にオープンした「Garden cafe oasis」。四季折々の花が咲きほこるお庭を眺めながら、自慢のコーヒーやアイリッシュティ、ハーブティはいかがですか。親子で楽しめるスペースがモットーなので、赤ちゃん連れのご家族やお友だちともゆったりとくつろいですごせます。ふわとろのオムライスやパスタのランチもおすすめ。新病院からは前の駐車場の奥のドアをあければ、お庭づたいに入れますよ。ママ会やお子さまのお誕生会などのご利用も承っています。

地域とのふれあい

東大阪で！大阪南港で！赤ちゃんと家族が大集合

東大阪発〈ふれあい祭り〉

大型連休最終日の5月8日日曜日は、恒例の東大阪市民手作りによる〈ふれあい祭り〉。第39回目の今年は、約40万の人出で、東大阪は熱く盛り上がりました。

小阪産病院も、金魚すくいや模擬店などにまじって、早朝からスタッフが準備を開始して参加。人気はおなじみの赤ちゃん写真コンテストの入賞作品の展示です。小阪産病院生まれの〝小阪っ子〟たちの写真が、道行く人の微笑を誘っていました。

体験コーナーでは、骨密度測定やおもり入りの服を使った妊婦体験、女性のための健康相談、テンマンスからは赤ちゃんグッズのセールなど盛りだくさんです。昨年オープンした産後ケアセンター小阪や、小阪レディースクリニックもパネル展示で紹介。当院で生まれた、お産した方などが立ち寄って声をかけて下さり、改めて小阪産病院が地元に根づいていることを、スタッフ一同実感しました。

インテックス大阪発

出産育児の体験型情報発信イベント

〈マタニティカーニバル2016〉

今年で11回目を迎えるマタニティカーニバル2016は、6月4日、5日の2日間、インテックス大阪で開催され、来場者は2日間でのべ2.3万人と大盛況でした。

このイベントは、10年前の2006年、大阪の産婦人科医10名が発起人となり「出産、育児の不安を解消し、子どもを生み育てる楽しみを伝える情報発信の場」としてスタート。様々な企業や団体の協力を得て、年々充実、今や大阪を代表する一大マタニティイベントに発展しました。

今回も会場では、産科医によるセミナーや、マタニティ・フラ、パパも学べるベビータッチケア、妊婦さんの足つぼトリートメント、妊婦歯科検診、4D超音波など、体験コーナーが大人気。「来て、見て、触って、体験して笑顔いっぱい」の楽しいマタニティライフ、出産、育児生活につながる充実のラインナップです。

小阪産病院では、竹村秀雄理事長がイベント実行委員会会長として、開催当初より協力。主に体験コーナー〈4D超音波、骨密度、血液サラサラ、パパのマタニティ体験〉などを担当し、大阪府臨床検査技師会のボランティアスタッフとともに活動しました。

PART2

未来とつなぐ

“小阪っ子”乾杯!……24

リーダーたちの思い……26

未来とつなぐ、愛・アイ・あい
一つになったチームワークと
熱い思いでつなぐ未来の命……30

高い技術と妥協を許さない責任感で
つなぐ健やかな命……32

温かなホスピタリティーと
笑顔でつなぐ快適な入院生活……34

快適な入院生活と
楽しい思い出でつなぐ明るい明日……36

覚悟・危機感・使命感

理事長　竹村 秀雄

近頃、〝覚悟〟ということをよく考えます。一人の産婦人科医として身を引くべき時はいつか、その覚悟はできているのかと。

初代院長の父直治は、私にとっての平岡院長のような本当の意味でのパートナーはなかったが、ほとんど二人で二つの病院をやっていた。その父が亡くなり34歳で院長に就任し、病院経営と診療の全責任を負う立場になったとき、家内に助けられたとはいえ、ずっと覚悟＝危機感を持っていた。それを支えに30～40代の頃は、一人で三人分の仕事をしてきたという自負があります。

産科病院にとって、安全安心に限りはありません。私が産婦人科医になった当時に比べると、周産期死亡率ははるかに減ったが、今でもお産は予測がつかないことが発生する。これまでに産科医は厳しすぎると思ったことはあります。でもお産が嫌だと思ったことは一度もない。

つまるところ、私はお産が好きなんですね。最近、そのことに気づきました。朝、外来をやりながら『なんか、僕は今日、元気があるなあ』と不思議に思って、よくよく考えてみると、『ああ、昨日お産、2つとったなあ』と気づく。お産の翌日は、コンデションというか気分が違う。やはり生まれてくる子どものエネルギーをもらうんでしょうか。緊張とストレスがぐっと押しよせてきて、最後にハッピーエンドを迎える。元気な赤ちゃんの誕生で、お母さんも周りの家族もスタッフも喜ぶ。それがいいんでしょうね、僕にまで元気をくれる。

新しい病院に移り、若いスタッフが活々と働いているのがありがたい。病院は外も中も変わりつつあります。患者さんも変わった。今は社会的精神的ハンデのある人が増えています。それに対して、看護部スタッフの働きがめざましい。特別養子縁組や、地域の保健センターと連携して支援したり。私立の当院にとって、経営的に芳しいこととはいいがたいけれど、社会的使命ということで、どこかが引き受けないといけない。それが当院ということなんでしょう。おそらく地域の診療所がこれまでずっとカバーしてくれていたのでしょうね。それが全てなくなってしまったから、今までの当院の能力ではむずかしかったケースも扱わざるを得ない、ということです。

その覚悟、といってもこの場合は危機感ではなく使命感、をもってひたむきに取り組む姿勢。スタッフの地道でたくましい底力に驚きます。しかしまた、そこには、なんでもまずやってみようとしてきた当院の気風というものを感じ、頼もしくもあります。私を乗り越えて次に続く若い人たち、その力が脈々と受け継がれていくことを確信しています。

妊婦さんの産む力を全力でサポートする産病院

副理事長　竹村 真紀

お産は年々減ってきていますが、絶対になくなることはない、人間のライフイベントのひとつだと思います。その人生で大事なお産が、現実にはむずかしくなっている。高齢に限らず、若い方でも自分の力で産めなくなっているのですね。とても心配です。

現代はなんでもほしいものは手軽に手に入れられる便利な時代。お産も然りです。充実のマタニティライフとか楽しい妊活とか、それ自体は決して悪くなく参考にしたい部分もありますが、ただ快適さや楽な方ばかりに流れる傾向に、危機感のようなものをおぼえます。

お産は本来、誰でも自分の力で産めるもの、という当たり前のことを、あらためて妊婦さんに伝えていきたい。地道に繰り返し発信したい。楽しいこともいいね、でも自分で学ぶことややることもあるよ、大丈夫、一緒にがんばりましょう。私たちはそのためならいくらでも手を差しのべる用意があるよ、と。そういうスタンスを守りながら、妊婦さんをお産をサポートする小阪産病院でありたい。

それは今の時代に逆行しているかもしれません。実際の現場では、全面的にご希望に沿うケースもある。でもやはり、できるだけ多くの方に、苦しくても満足のいくお産をしたと自覚できる体験をしてもらいたい。お産はゴールではなく育児のスタートだから、切実に思います。

とはいうものの、私自身、育児も仕事も周囲の助けでなんとかやってこられたので、えらそうなことはいえません。ガンバレと激励するだけじゃなく、産婦さんにしてあげたいこともいろいろあります。例えば、エステやヘアをやっている流れから、ネイルは無理でもハンドケアはしてあげたいな、とか。赤ちゃんの「食」にもかかわりたい。レトルトの離乳食は充実しているけれど、味覚の鋭いといわれる赤ちゃんには、自然素材のおだしで作ったものを食べさせたい。ママ友たちが集うカフェ〝オアシス〟もできたので、いつかママたちと取り組むことができたら、と考えたりします。

すでに形になり活動中の産後ケアセンター小阪と小阪レディースクリニックは、一年を経て軌道に乗り、地元の人に受け入れていただいているのを実感し、心から安堵しています。おっぱいや育児がしんどいママたちの〝駆け込み寺〟のような産後ケアセンター。そして今まではお産をみるのに精一杯でしたが、レディースクリニックができて窓口がふえ、専門医がいてくれるので、こちらとも連携しつつ、地元のホームドクター的な存在になればと期待しています。また、症状がない〝未病〟の段階からおつきあいを、との提案もしていきたいですね。

小阪産病院のルーツは川向こうの延命寺さん

昭和6年7月10日、東大阪市菱屋西3丁目に産声をあげた小阪産病院。今年、創立85周年を迎えました。もともとは、近くにあった延命寺の住職、大前聖順師が創設した「小阪産院」を、竹村秀雄理事長の父、初代院長の竹村直治が譲り受け、「小阪産病院」として引き継いだものです。今回、当時まだ幼かった現住職の奥野知昌師(96歳)にお話を伺うことができました。

延命寺地蔵堂の本尊、地蔵菩薩坐像は、ゆったりとした衣紋が腹帯のようにみえることから、昔から地元の人たちに「腹帯地蔵」「腹帯さん」と呼ばれて親しまれ安産や子育て地蔵として知られておりました。そんなこともあってか、私が思うに産所のようなものがあればと「小阪産院」を始めたのではないでしょうか。

当時のこの辺りは家などなく、松林に青い草原が一面に続いているようなところでした。川も大和川の支流としては川幅ももっと広く大きく、貝が出てきたりしました。私が10～11歳くらいの頃で、よく母に連れられて産院へ行きました。直治先生とはお話しした記憶はありませんが、目がくるっと大きくてね、なんや学者さんのような誠実そうな方やなぁと、子ども心に思ったもんでした。

小阪産病院になってからは、会長の竹村志づるさんが、よくお参りにみえました。足がご不自由になってからも、渋谷さんが「大きい奥様のおつかいです」といって、お盆やお彼岸にはお庭で見事に咲かせはったハスや蘭の花を届けてくださいました。

私は今、96歳でして、もう自分でも驚いております。小学校や女学校のお友達も皆いなくなってしまいました。私だけ残ったら困るなあと思っていましたが、いや私があとに残るのがええのかなあ思ったりもします。

このたびは御立派な新しい病院になって、川をはさんでほぼ向き合うようなかたちでお近くになりました。夜、お向かいの小阪さんの病室にぽっと明かりがつくと、「ああ、赤ちゃんが生まれて入院されたんや、あれは希望の光やなあ」と、娘が嬉しそうに申しますの。ほんまにそうです、このご縁に心から感謝いたします。

小阪産病院85年の歩み

小阪産病院の歴史

- 1931 ● 初代院長 竹村 直治 現在地に小阪病院創立（23床）
- 1940 ● 竹村病院（21床）を上本町7丁目に開設
- 1951 ● 医療法人（財団）竹村医学研究会設立　竹村直治理事長
- 1965 ● 小阪産病院を鉄筋コンクリート4階建（45床）とし竹村病院閉鎖
- 1969 ● 竹村直治理事長死去　竹村 志づる理事長、竹村 秀雄院長 就任
- 1971 ● タナックマークカードセレクター導入
- ● 周産期データベース構築
- 1972 ● 東大阪ギネグループ、武博彦会長ら12名で結成
- 1973 ● 分娩監視装置コロメトリックスFM-S101導入
- 1974 ● 日母型分娩監視装置導入
- 1975 ● 母体死亡・未熟網膜症裁判、府医の援助、長内先生・杉山先生の応援
- 1976 ● 地上3階・地下1階 北館増設（61床）血液ガス分析装置
- ● 経皮的PO2測定器　CPAP　超音波診断装置（アロカ製手動式）導入
- 1978 ● 東京オペグループ加入
- ● 電子スキャン超音波診断装置導入
- ● 竹村 晃理事（大阪大学助教授）死去

社会の出来事

- 1931 満州事変
- 1937 日中戦争
- 1941 太平洋戦争
- 1945 広島・長崎に原爆投下　終戦
- 1947 第1次ベビーブーム（～1949）
- 1949 ノーベル物理学賞に湯川秀樹氏
- 1950 朝鮮戦争
- 1952 ヘルシンキ五輪（16年ぶりに参加）
- 1953 テレビ放送開始
- 1957 南極に昭和基地建設
- 人類初の人工衛星打ち上げ（ソビエト連邦）
- 1964 東京五輪
- 東海道新幹線開通
- 1965 ノーベル物理学賞に朝永振一郎氏
- 1966 ビートルズ来日
- ひのえうま
- 1968 小笠原諸島復帰
- ノーベル文学賞に川端康成氏
- 1969 東大紛争安田講堂事件
- アポロ月面着陸
- 1970 大阪万博
- 1971 第2次ベビーブーム（～1974）
- 1972 沖縄復帰
- 札幌冬季五輪
- 中国から上野動物園にパンダ2頭
- 横井庄一元日本兵グアム島から帰還
- 1973 オイルショック
- ノーベル物理学賞に江崎玲於奈氏
- 1974 小野田陸軍少尉 フィリピンルバング島から帰還
- 「ベルサイユのばら」による宝塚ブーム
- ノーベル平和賞に佐藤栄作氏
- 1975 ベトナム戦争終結
- 1976 沖縄海洋博
- ロッキード事件
- 五つ子ちゃん誕生（鹿児島）
- 1977 NMCS（新生児診断相互補助システム）発足
- 1978 日中友好平和条約締結

小阪産病院の歴史

- 1980 ラマーズ法導入
- 安産教室開始
- 初代レセプトコンピュータ導入
- 1981 50周年記念誌「小阪産病院 半世紀の歩み」発行
- 1983 検査室を地下に移動
- ベビー搬送用レスピレーター
- 腹腔鏡導入
- 1984 妊婦指導用「ママと赤ちゃんの280日」初版発行
- 1985 ハートタイムス創刊号発行
- 1988 経膣超音波診断装置導入
- HIS研究会加入
- 1989 10回胎動カウント開始
- 1991 第8回HIS研究会主管
- 60周年記念誌「うぶごえ」発行
- マタニティビクス開始
- 初代周産期データベース導入
- 1992 SMC式乳房マッサージ導入
- 両親学級開始
- 仲野・竹村共著「プラクティカル産科学」発行（メディカ出版）
- 1994 竹村 志づ系会長・竹村 秀雄理事長 就任
- 基準看護承認
- 出産お祝いフレンチディナー開始
- 1996 増改築工事完了
（LDR5室、助産師外来、赤ちゃん外来、患者食堂）
- 新看護2.5対1認可
- 病院年報発行開始（以降毎年）

- 1997 竹村 秀雄著「経膣超音波ー産科症例に学ぶー」発刊 （メディカ出版）
- 第19回HIS研究会主管
- インターネットホームページ開設 院内LAN導入
- 1998 第46回産婦人科情報処理研究会主管
- 朝食バイキング開始
- 1999 日本医療機能評価機構認定（Ver.2）
- バースプラン導入
- 2000 クリニカルパス導入
- 2001 増改築工事完了（外来・超音波室・レントゲン室・検査室の改装 LDR1室増床）
- 2002 70周年記念誌「すこやか」発行
- 2004 日本医療機能評価機構認定（Ver.4）
- 外来予約制、オーダリング開始
- 倫理委員会発足 育児サークル発足

- 2005 平岡 仁司院長就任、赤岩 明副院長就任、原 達幸小児科部長 就任
- 竹村 真紀医師 入職
- フルオーダリングシステム導入
- 竹村 秀雄編「助産師外来で役立つ超音波検査ガイドブック」発刊（メディカ出版）
- 2006 75周年記念行事「すくすく小阪」開催
- マタニティーカーニバル2006に参加（以後毎年）
- 入院基準看護7対1認可
- 新周産期データベース構築
- 2007 地域医療連携室開設
- 院外処方箋制度
- 2008 DPC対象病院認定
- 医療法人改革により評議員会設置
- 職員の信条クレド「Himawari」決定
- 2009 第1回TQM大会開催

社会の出来事

- 1980 英国で試験管ベビー誕生
- イラン・イラク戦争
- 1981 東北上越新幹線開通
- ノーベル化学賞に福井謙一氏
- 1983 東京ディズニーランドオープン
- 東北大学で日本初の体外受精児誕生
- 1984 新紙幣（一万円、五千円、千円）発行
- 1985 日本航空123便墜落事故
- つくば万博
- 1986 伊豆大島三原山噴火
- チェルノブイリ原発事故
- 1987 OGCS（産婦人科診察相互補助システム）発足
- 瀬戸大橋開通
- ノーベル生理学・医学賞に利根川進氏
- 1988 ソウル五輪
- カルガリー冬季五輪
- 1989 昭和から平成へ
- 消費税3％がスタート
- ベルリンの壁崩壊
- 1991 湾岸戦争
- ソ連改革
- 1992 雲仙普賢岳の噴火、火砕流により死者行方不明者43名
- バルセロナ五輪
- アルベールビル五輪
- 1993 毛利衛氏スペースシャトルで宇宙飛行
- Jリーグ開幕
- 皇太子さまと雅子さまご成婚
- 学校週5日制
- 1994 EUが発足
- 日本初の世界遺産登録
- リレハンメル冬季五輪
- 東京サミット
- 1995 ノーベル文学賞に大江健三郎氏
- 関西国際空港開港
- 阪神淡路大震災
- 地下鉄サリン事件
- 1996 WINDOWS95発売
- アトランタ五輪
- 1997 O157食中毒
- 香港、イギリスから中国に返還
- ダイアナ妃死去
- マザーテレサ女史死去
- タンカー「ナホトカ号」座礁
- たまごっちブーム
- 1998 消費税5％に
- 長野冬季五輪
- 明石海峡大橋開通
- しまなみ海道開通
- 環境ホルモン問題
- FIFAワールドカップ（フランス大会）に日本初出場
- 郵便番号3桁から7桁へ
- 1999 ヨーロッパ単一通貨ユーロ
- 2000 マカオ、ポルトガルから中国に返還
- 沖縄サミット
- シドニー五輪
- 2001 西暦2000年問題
- 二千円札発行・新500円硬貨発行
- ノーベル化学賞に白川英樹氏
- USJ大阪オープン
- 2002 狂牛病問題
- 同時多発テロ
- 雅子妃殿下ご出産
- ノーベル化学賞に野依良治氏
- 学習指導要領「ゆとり教育」スタート
- FIFAワールドカップ日韓共同開催
- 2003 ノーベル物理学賞に小柴昌俊氏
- ノーベル化学賞に田中耕一氏
- 感染症SARSが世界的に流行
- 2004 阪神タイガースが18年振りセ・リーグ優勝
- 日朝首脳会談で拉致家族5人が帰国
- 米大リーグでイチロー選手が262本のシーズン最多安打記録達成
- 新紙幣（一万円、五千円、千円）発行
- 年間平均気温が各地で過去最高を記録
- 2005 NHK「冬のソナタ」で主婦層に韓流ブーム
- 日本国際博覧会「愛・地球博」開催
- JR福知山線脱線事故
- 個人情報保護法全面施行
- 紀宮清子内親王と黒田慶樹様がご成婚
- 2006 日本の人口が1899年の統計開始以来初の自然減
- 日本郵政株式会社発足
- トリノ五輪で荒川静香選手がフィギュアで日本人初の金メダル獲得
- 第1回ワールド・ベースボールクラシックで王ジャパン初代王者に
- 2007 秋篠宮文人親王にご長男誕生（悠仁親王と命名）
- 「消えた年金」で社保庁に怒り沸騰
- 止まらぬ食品偽装「食」の安全・信頼大きく揺らぐ
- 2008 米国サブプライム住宅ローンをきっかけに世界的な金融危機に発展
- 鳥インフルエンザが発生
- 米証券大手リーマン・ブラザーズの経営破綻
- ノーベル物理学賞に南部陽一郎、小林誠、益川敏英の3氏、化学賞に下村脩氏
- 後期高齢者医療制度スタート
- 北京五輪開催

小阪産病院の歴史

- 日本医療機能評価機構認定（Ｖｅｒ.６）
- ＯＢ・ＯＧ会（ひまわりの会）発足

２０１０
- デジタルマンモグラフィー（ＧＥ社）導入（専門医による乳癌検診開始）
- 役職者研修会（６回）開催
- 骨盤ケア教室開始

２０１１
- 80周年記念行事開催 キャッチフレーズ「ぎゅっと愛」
- 東大阪ふれあい祭りに初参加（以降毎年）

２０１３
- 竹村秀雄理事長、産婦人科医療功労者として厚生大臣表彰される
- 新病院建設着工
- 第１回地域医療連携懇話会開催

２０１４
- 医師事務作業補助25：１認定
- 小阪産茶会開催

２０１５
- 小阪産病院　新病院完成
- 小阪レディースクリニック開院
- 産後ケアセンター小阪開院
- Garden cafe oasis　オープン
- 日本医療機能評価機構認定（３ｒｄＧ:Ｖｅｒ.1.0）

1960年頃の小阪産病院

社会の出来事

２００９
- 中国製ギョーザで中毒
- ＥＴＣ利用で地方圏で高速道路が土日祝日、上限千円で乗り放題
- 米史上初の黒人（アフリカ系）大統領が誕生
- 新型インフルエンザが大流行

２０１０
- 中国の国内総生産（ＧＤＰ）、日本を抜き世界2位の経済大国に
- ノーベル化学賞に鈴木章、根岸英一氏
- 宮崎県で口蹄疫拡大により牛大量殺処分
- 小惑星イトカワから「はやぶさ」が帰還

２０１１
- 東日本大地震と津波で被害甚大
- 九州新幹線　博多駅～鹿児島中央駅全通
- 地デジへ完全移行

２０１２
- ＦＩＦＡ女子ワールドカップドイツ大会でなでしこジャパンが優勝
- インドネシアのスマトラ島でＭ8.7の巨大地震
- ロンドンオリンピック
- ノーベル生理学・医学賞に山中伸弥氏
- 日本海側を中心に平年の2倍前後の積雪

２０１３
- 三浦雄一郎がエベレストに史上最高齢（80歳７ヶ月）で登頂
- 東北楽天ゴールデンイーグルスの田中将大が24勝０敗で勝率：１．０００
- 横綱白鵬が９度目の全勝優勝、大鵬・双葉山の記録を超える
- 長嶋茂雄と松井秀喜に国民栄誉賞

２０１４
- 『森田一義アワー笑っていいとも！』が８，０５４回で放送終了
- 消費税増税実施（５％を８％に）
- クルーズ旅客船「セウォル号」沈没
- ＳＴＡＰ細胞に関する騒動起こる
- 高さ３００ｍの日本一高いビル、あべのハルカス完成
- 過激派イスラム組織ＩＳＩＬが各地でテロ

２０１５
- 世界各地でエルニーニョ現象による異常気象
- フォルクスワーゲンの排出ガス規制不正問題
- 東京五輪オリンピックエンブレムの盗作騒動

２０１６
- 中国株式市場で株価が急落
- オバマ大統領が現職大統領として初めて広島市を訪問
- 「マイナンバー」カードの交付開始
- ＳＭＡＰ解散騒動

85周年に寄せて

編集後記

本誌、小阪産病院85周年記念誌のテーマは「つなぎ愛」とさせていただきました。
これは85年という長い年月の間につながってきた、すべての「ご縁」を大切に、支え合ってきた竹村理事長をはじめ諸先輩方、現スタッフの皆様の「つなぎあい」が今の小阪産病院を構築してきたという証と確信したからです。取材、編集を通して、同僚とのつながり、部署のつながり、同職種でのつながり、地域でのつながり……と「つなぎあい」は無限に広がる事を再認識できました。また、つがなりを見返しているうちに、当院のルーツである延命寺さんにたどり着き、貴重なお話しをお聞きする事もできました。

当法人は昨年、婦人科・乳腺外科部門の専門クリニックとして「小阪レディースクリニック」、産後の母子支援の専門施設の「産後ケアセンター小阪」、地域の皆様に癒しを提供する「Ｇａｒｄｅｎ ｃａｆｅ ｏａｓｉｓ」の3施設を開設し、それぞれに1周年を迎えました。個人的な感想となってしまいますが、創立55周年記念誌から数えて7冊の記念誌を担当させていただいた中で、初めて複数の施設で迎えた記念誌となった事を感無量に感じております。
この記念誌の発刊を機に、今後はグループとして全施設が共に発展していく事を心から祈念して編集後記とさせていただきます。

編集長　**栗本 幸司**

編集委員

部局会

竹村　秀雄
平岡　仁司
伊藤　敏男
川原　隆文
三田村七福子
徳永　明美
淺野　有咲
金　英仙
斎藤　紀子
廣瀬　えり
佐藤　けい子

広報委員会

鈴木　誠人
柳　美紗
井上　知畝
下島　綾子
田井　久美子
長井　典子
近野　純子
角田　昌子
藤本　有美
新川　陽子
髙橋　亜子

協　力

小倉　正嗣（撮影）
おぐら　もよ（取材・文）
北川　聡（編集 株式会社コミニケ）

小阪産病院 85 周年記念誌
つなぎ愛

2016（平成28）年8月発行

編集・発行　医療法人竹村医学研究会（財団）
〒577-0807 大阪府東大阪市菱屋西3-6-8
Tel.06-6722-4771　Fax.06-6724-8381
URL http://www.kosaka.or.jp

印刷・製本　株式会社研文社

2016 Printed in Japan